voice

カンボジアでの歯科ボランティア
医療人不足の国を知っていますか？

飯島華奈子 *Kanako IIJIMA*
東京都・高見歯科医院　歯科衛生士

“100万人に10人”の歯科医師

100万人に約820人。これは、わが国における歯科医師数の割合です（厚労省：平成28年 医師・歯科医師・薬剤師調査の概況より）。

一方、40年以上前に医療人が大量虐殺された国があります。世界遺産のアンコールワットで有名な、カンボジア王国（以下、カンボジア）です。当時、ポル・ポト率いるクメール・ルージュの支配下で、医療人を含む多くの知識人が虐殺されました。アンコールワットのあるシェムリアップ州では、100万人に対して約10人の歯科医師しかいないという状況です（SCHEC：認定NPO法人カンボジアの健康及び教育と地域を支援する会調べ）。

驚くことに、数年前は100万人に対してわずか３人だったそうです。少しずつ人数は増えているものの、いまでも深刻な歯科医師不足であり、歯科医師の治療を受けられる機会はほとんどありません。また、１本の抜歯に約10ドルかかるため、一家族の生活費が１日１ドルということも珍しくない農村部では、歯科医院に行くことさえできないのが現状です。

各地には、首都プノンペンで歯科治療を学んだ、無免許の歯科アシスタントがいます。しかし、外科治療ができないため、状態が悪い歯は手を施せず、鎮痛剤を飲んでやり過ごすしかないそうです。そのため、異国から来る歯科医師に頼るのです。

SCHECの歯科ボランティアに参加

SCHECが行うカンボジアでの歯科ボランティアに参加したきっかけは、「寄付金はすべて現地で使う」という理念に感銘を受けたからでした。現地に赴いてからは、歯科診療以外にも、校舎の建設や衛生的な水を汲める井戸の設置を行いました。SCHECは毎年同じ場所で歯科診療活動を行っているため、噂を聞きつけて診療開始前から大勢の患者さんが並んでいました。

診療内容は、治療とスケーリング、TBIに分かれます。印象に残っているのは、高校生くらいの若者の歯石が驚くほど多いことです。学校でのTBI活動の継続により、多くの若者は歯を磨く習慣がありますが、磨く場所がわかっていないようで、全顎にわたり歯肉縁上・縁下歯石がびっしりと付着しています（**図１**）。

年に一度のスケーリングを希望する子どもや若者も多く、麻酔なしで歯肉縁下歯石を除去します。まだ若いので、超音波スケーラーでも簡単に取れます。日本のように容易に治療を受けることができないので、みんな痛みを我慢してくれます。しかし、歯肉が腫れていることがとても多く、TBIの改善が必要と感じています。

図❶　全顎にわたり歯肉縁上・縁下歯石が付着している、カンボジアの15歳の若者

図❷　屋外での診療では、限りある設備で治療を進めることが求められる

1|1歯間部のう蝕と1|1の切端が半分くらい欠けている子どもが多かったのですが、これは今年の特徴とのことでした。通訳の方に聞くと、「子どもたちは前歯で飴を噛む。みんなやるでしょ？」とのことです……。

継続して診ていけないため、日本ではインレーや根管治療で治せる症例でも、抜歯になるケースが少なくありません。しかし、抜歯は最後の手段です。一人の治療も、数名の先生と相談して進めていました。日本のように計画を立ててから治療を行えないので、この１回でいかに本人のためになる治療をするのか、一人ひとりに真剣に向き合いました。そのため、１日に診る人数に限りがあり、せっかく並んでいただいた患者さんを治療できないことも多かったのです。今回は約40人のメンバーでカンボジアを訪れましたが、もっと人数がいれば、より多くの患者さんを治療できるため、参加者が増えてほしいと切に願っています。

治療環境を整える創意工夫

診療は屋外で行うため、チェアーは簡易的なものです（**図２**）。発電機を回して治療を行いますが、急に止まってしまうこともあります。また、運べる水の量が限られるため、治療用に優先され、口をゆすいでもらうことができません。バキュームが止まればゴミ袋を用意して唾を吐き出してもらったり、タービンが使えなくなればエキスカベーターでう蝕の除去を行ったりと、限りある器具で治療を進める光景に脱帽でした。

貧しい村を訪れる機会もありました。屋根がバナナやヤシの葉でできていたり、キッチンが外にあったりと、衛生面の悪さに衝撃を受けました。しかし、村の奥へ行けば行くほど、う蝕の割合が減っていくのです。これは、お金がないため甘いものを食べる機会が少ないのが幸いしているのだと思います。複雑な思いを抱きます。

思いがけない一言

歯科診療の他に心に残ったのが、とある寺院で出会った80歳くらいのおばあちゃんの言葉です。やせ細った体で、「むし歯が痛くて眠れない」と話していました。しかし、その日は診療器具や薬を持ち合わせておらず、何もできないことを悔やみました。そんな私たちに、彼女が別れ際に「体に気をつけて元気に長生きしてください」と言うのです。あきらかに自分より恵まれている私たちにかけてくれた温かい言葉に、涙が溢れました。

◉

読者のみなさんのなかには、ボランティアに参加したくてもなかなか行動に移せない方がいると思います。以前の私もそうでした。自身の経験を踏まえて、悩んでいる方にお伝えしたいのは、「悩んでいる時間がもったいない！　ぜひ参加してほしい」ということです。ボランティア活動を通じて、日々の診療とはまた違った経験ややりがいを感じられるはずです。

日本とかかわりの多いこのカンボジアという国に、明るい未来が訪れることを望んでいます。

SCHECの歯科診療活動に関する詳細は、WEBサイト（http://www.schec.org/）をご参照ください